

① みなさんは、ロボットというと、どのようなものか。人間の能力をこえた強い存在でしょうか。でも、ごみを見つけることはできるけれど、自分ではごみを拾えないロボットや、ただいっしょに手をつないで歩くだけのロボットがいたらどうでしょう。これらのロボットは、わたしが研究している「弱いロボット」とよばれるものです。一見、何の役に立つのか分からないこの「弱いロボット」は、わたしたちとテクノロジーの関係を考えるうえで、重要な視点を投げかけてくれます。

② 現在、わたしたちを取り囲むテクノロジーは、目まぐるしい進歩を続けています。インターネットから必要な情報をいつでも得られるスマートフォンやパソコンは、もはやわたしたちの生活の一部となりました。かつては夢の技術であった自動車の自動運転機能も実用化が進んでいます。ロボットについても、医療の現場や家庭など、人と関わる際に使われるものが登場し、高性能化が進んでいます。

③ テクノロジーが進歩し、次々に新しい製品が開発される背景には、「便利で高い性能を持つものほどよいものだ」という考えがあります。しかし、そうした「何かをしてくれる」製品が世の中にあふれることにより、わたしたちは、自分が「何かをしてもらう」存在であることをあたりまえのように感じるようになります。そうすると、わたしたちはますます多くの機能や便利さを求めるようになり、してくれないことにがまんができなくなったり、してもらって当然だという気持ちになったりすることが増えてしまいます。

④ そのような問題を考える中で生み出されてきたのが、「弱いロボット」です。「弱いロボット」は、高い性能や多くの機能をそなえたものではありません。それどころか、一人では何もできないようなロボットばかりです。しかし、その不完全な部分があることで周りの人の助けを引き出し、目的を達成することができます。

⑤ 具体的に、「ごみ箱ロボット」の例を見てみましょう。「ごみ箱ロボット」は、その名前のとおり、ごみ箱の形をしたロボットです。見た目はほとんどごみ箱であり、車輪が付いて動けるようになっていてるものです。このロボットには、ごみを拾うための機能がありません。底に付いた車輪を使って、よたよたと歩きながらごみを見つけます。この歩く動きは、まるでたよりない生き物のように見えます。この「ごみ箱ロボット」の様子を見た人は、思わず、手にしたごみを投げ入れたり、落ちているごみを拾って入れたりします。すると、このロボットは、センサーによってごみが入れたことを感知し、小さくおじぎをします。ごみを入れた人は、これを見て、何となくうれしい気持ちになるようです。こうやって周りの人の協力を得ながら、このロボットはその場をきれいにすることができるようになります。

⑥ このように、「弱いロボット」には、周りの人の協力を引き出したり、行動をさそったりする力があります。「弱いロボット」と関わるわたしたちも、たがいの思いが伝わる気がしたり、手伝うことの喜びを感じたりすることができるようになります。

⑦ この「弱いロボット」が持つ「弱さ」は、人間の赤ちゃんに似ているのではないのでしょうか。生まれて半年ほどの赤ちゃんは、歩くこともできませんし、言葉話すこともできません。一人で何もできないという意味では、「弱い」存在だと言えるでしょう。しかし赤ちゃんは、何もできないのに、周りの大人たちの関心と手助けを引き出します。赤ちゃんがぐずりだすと、大人たちは、「おなかがすいたのだろうか。」「遊んでほしいのかな。」「などと考え、ミルクを用意したり、おもちゃで遊んだりします。「弱い」存在でありながら、周囲の人々の協力を引き出すことで、食事をとり、ほしいものを手にすることができるようになります。

⑧ 赤ちゃんは、自分と人々との関わりだけでなく、周囲の人どうしの協力関係も作り出します。赤ちゃんとともに世話する集団として、周りの大人たちは、赤ちゃんの力になることに喜びを感じることができるようになります。

⑨ 「ごみ箱ロボット」が、自分では十分な機能を持たずにその場所をきれいにすることができるようなのは、こうした関わり合いを、ロボットと人間の間に、あるいは、その場にいる人間どうしの間に作ることができるからなのです。それは、「何かをしてもらう」人間と「何かをしてくれる」ロボットのような関係ではなく、たがいに支え合う心地よい関係だと言えるでしょう。

⑩ これからもテクノロジーの進歩は続き、ますます便利で高性能のものも生み出されていくでしょう。しかし、次々に新しい機能を追加して完全なものに近づけようとするほど、テクノロジーとわたしたちの関係は、心地よいものから遠ざかってしまうのではないのでしょうか。

⑪ 「弱さ」を受け止め、たがいに関わりながら生きていくこと。「弱いロボット」が見せてくれるのは、テクノロジーとわたしたち人間が共存していくための未来の在り方であり、また、わたしたちが人間どうしのつながりの中に求めるものなのかもしれません。